

伊勢物語流布本の源流とその性格

山 田 清 市

奥書のみを有するものを第一類とされ（千葉本、七海本等）
更に前記奥書の次に

近代以狩使事爲端之本出來未代之人今案也更不可用之、此物
語古人之說不同或稱在中將之自書或稱伊勢之筆作就彼此有書
落事等上古之人強不可尋其作者只可斷詞華言葉而已

戸部尚書在判

の奥書（之は武田本奥書の中最初の一行が脱落したもの）があり
更にそれにつづいて

以祖父卿眞筆本不違一字書寫校合之可備證本矣

藤 爲相

という爲相の識語が附せられているものを第二類（山崎宗鑑本、
傳飛鳥井雅世筆本等）とされたのである。而して第一類諸本はこ
く少数でこの爲相識語を持つ第二類系統は數の上からいっても壓
倒的に多く、流布本系統の主流をなすものであつて、之がいかな
る祖本より發したかは、伊勢物語傳本史上に於いて、まことに重
大な問題であると考へる。

一

數多くの伊勢物語諸本の中、定家本系統については所謂、天福
本、武田本、流布本の三類が室町期以來立てられて來た。而して
天福本、武田本についてはその性格・形態を究め得る好寫本を尚
現在に傳え、且その傳來の經路も又諸文献によつて明らかにされ
て來たが、ひとり流布本にあつてはその原本の性格はもとより、
傳來の經路も一切不明で、既に室町期、細川幽齋によつて

是までが世間流布の一本の奥書也、されども此本は誰人相傳
して所持するとも聞えず（闕疑抄）とされていたし又、

抑いせ物語の根源とある定家の自筆の本、近代失せたり（書跋
部藏伊勢物語
簡抄）

と記されているのによつてみるも既に室町期に於いて流布本に關
する確實な傳聞はすつかり絶え、以來この本の性格と源流は深い
謎につつまれて來たのであつた。而して池田博士はその諸本の調
査に基づいて流布本系統を二つの流れに大きく分類され、その一
は所謂「抑伊勢物語根源古人説々不同」で始まる純然たる流布本

一體、爲相の識語は「抑根源」の流布本奥書に本來つくべきなのか、それとも武田本奥書につくべきなのか從來、不明とされてきたが流布本系統の諸本に於いて、爲相の識語が、「抑根源」の奥書のすぐ次にあるものは、一本もなく、武田本奥書の次にそれがいづれも位していることは爲相の識語と武田本との關係が極めて密接不離なることを裏書きしているものと思われる。又識語によれば爲相が、祖父の眞筆本を以て、一字違わず書寫したというのであるから、爲相が書寫したのは定家自筆の「抑根源」の奥書を持つ本か武田本かのどちらかでなければならぬことは明白である。而るに流布本第二類諸本は「抑根源」の奥書に定家の官名と花押、業平の年譜（之は省略されたものもある）それに更に又武田本奥書に定家の官名と花押が並んでいるのであつてこうした形態の奥書は斷じて定家の自筆本にはなかつた筈である。かの一條兼良の「愚見抄」巻末にも、京極黃門伊勢物語兩本奥書として武田本と流布本との奥書を別々に轉載しているのに徴するまでもなく、明らかに之は後にどちらかが書き加えられたものでなければならぬ筈である。大體もとの奥書の前に校合本その他の奥書を追記することは古寫本に於いては珍しいことではなく、現に書陵部藏の土佐日記卷末の數種の奥書の書き様もその一例で、爲相本が烏丸光廣の改竄本でその奥書が、定家本、實隆本の奥書を併有し、且光廣の識語を載せているのに徴しても明瞭である。(註1)

それならば果たして爲相の識語は武田本奥書についたものであつたのかどうかということになるが、現在まで武田本にはそうした形態が見えなかつたのである。ところが爲相の識語が武田本の奥書についたものであることを實證する傳常縁筆武田本が出現したのである。本書は石川縣岡西直作氏の所有にかり完全な武田本本文と奥書を有しており最後に

寫本云 以祖父眞筆不違一字令書寫早

藤 爲相判

と記されているのであつて之は先に本誌十七輯に報告しておいたのでその形態の詳細は省略するが、その後本文の嚴密な校合の結果、本書は極めて純粹な武田本本文を有し、天福本、武田本相互の異同となつている四十三箇所の本文に一點も違ふところがないのみならず、武田本系統で現在最も優秀な本文を具えているとみなされて、天福本との對校に數多く用いられている岩瀬文庫本と本文の異同を比較するに第一表の如き結果をみたのである。最上段の數字は伊勢物語章段數を示し、表中の×印は本文の異同箇所が明らかに脱字、誤字、補入等と目されるものである。

今、傳常縁本と岩瀬文庫本との比較を試みるに、兩者が非常に相似た形態を有していることに氣がつく。兩者の比較によつて想定されることは定家自筆武田本のあるべき形態である。即ち兩者とも縦二十二、三櫃、横十五、六櫃であるから定家自筆本は四つ半の大きさであつたらしい。内容は兩者とも一面八行書きで一行約二十字詰、和歌は二字下げて二行書きになつている事によつて

〔第一表〕

×〇印 異同箇所
本文誤り

章段	岩瀬文庫本	誤	傳常縁本	誤
1	昔はかくいちはやき	×	昔人はかくいちはやき	
9	すゞろなるめを見ることと思ふに。	×	すゞろなるめを見ることと思ふ	
21	昔男いとかしこく思ひかはして	×	昔男女いとかしこく思ひかはして	
24	今宵あはむと契りたりけるを。	×	今宵あはむと契りたりけるに	
41	野なる草木ぞ別れざりけり。	×	野なる草木ぞ別れざりける	
44	この歌はあるが中に	×	この歌あるが中に	
46	人の國へ行きたるを	×	人の國へ行きけるを	
47	返しおとこ おほぬさと		返し おほぬさと	×
57	戀ひわびて海人の	×	戀ひわびぬ海人の	
60	まめに思はむといふ人につきて		まめに思はむといふ人につきて	×
65	大御息所とていまそかりける	×	大御息所とていますかりける	
69	ねんごろにいたはりにけり	×	ねんごろにいたはりにけり	
69	文徳天皇の御女		文徳天皇の女御	×
78	きのくにの千里のはまに		きのくに千里のはまに	×
82	山のにげて入れずもあらなむ	×	山のはにげて入れずもあらなむ	

ほぼこの様な形態を持つていたろうと思われる。何故ならば常縁本は爲相自筆本系統、岩瀬文庫本は幽齋自筆本系統で兩者全然その系統を異にしているにかかわらず、本文はいずれも第二枚目裏より書き初められ、一面行數、字詰、和歌の位置等、右の様な一致を示しているばかりか、漢字假名遣いも詳細に比較検討するに極めて同一に近く、よつて之は兩者が原本そのものの風姿を、内容形態共に保存しようとする事を物語るものであらうと思われる。而して傳常縁本は書寫年代も室町中期にさかのぼり、實に純粹度の高い本文を有しているものであり、武田本原本の形態は之によつて正確に伺うに足ると考えられる。正にその内容において、又武田本の形態を規定する上に於いても稀にみる重要な一本と云わるべきであらう。而も以下の考證に明らかな如くおびただしい流布本第二類諸本の源流をなした證本として伊勢物語傳本史上に於いて占める地位はまことに貴重といわれねばならない。とまれ以上によつて武田本の原本への還元は本書によつて極めて濃厚な可能性が示されたと思う。即ち定家自筆本は表紙中央に伊勢物語とかかれ第一枚は白紙第二枚の裏から一面八行で書き、和歌は二字下げ二行書きにし、本文は約二十字詰で八十七枚表に終る。本文行間に勅物が記入され、八十八枚表に奥書、その後白紙が二三枚つけられていたものと推定されるのである。さて

97	四十賀九條の家にて	×	四十の賀九條の家にて
101	よき酒ありと聞きて。上にありける	×	よき酒ありと上にありける
111	いにしへはありもやしけん	×	いにしへやありもやしけん
120	男女のまだ世へずと覺えたる	×	男女のまだ世へずと覺えたるが。
123	狩にだにやは君かこざらむ	×	狩にだにやは君はこざらむ

第一表に徴してみるも岩瀬文庫本に於いては十六箇所の誤りが指摘されるが常縁本では僅か四箇所という正に稀有とも云うべき粹度の高い武田本文を有していることがわかるのであつて現在のところ、武田本系統では恐らく最善本と目されるものであろう。

とまれ本書は爲相が祖父の眞筆を以て一字違わず寫したというものであればこそ、それこそ異常なる學問的嚴密さに於いて書寫したということが伺われるのである。元來、武田本はその奥書の一番最初に定家が「合多本所用捨也可備證本」と書いているのによつてみるも、伊勢物語の證本の地位を之に附與しようと思圖したものであることが伺われるのであつて、天福本は周知の通り定家が鍾愛の孫女に授けるために老眼を凌いで書寫したもので諸所誤りもまぬがれ難く、武田本と比較するも、例えば十四段の「あねはの松」を「あれはの松」、八十一段の「いたじきの下」を「たしきの下」等となしているのであつて、現在多くの註釋書が殆んど天福本文によつてゐるのはいかかなものかと考ふる。さて

以上の事實によつて傳常縁本が爲相自筆武田本の嚴密な書寫本である事、爲相がの祖父眞筆本を以て一字違わず書寫したというのは、定家自筆武田本そのものであり、よつて爲相の識語は武田本の奥書にされたものであることが明らかになつたと考ふる。

四

さて次に、而らば爲相の手もとに定家自筆武田本が傳わつていたのであるかどうかを調査するに東大圖書館藏武田本奥書に

此寫本定家卿自筆也、冷泉爲秀卿相傳之以被家注付畢、則以彼本寫置處先年於草庵燒失、無念之間重以同本誂東六郎常縁書寫校合之也、爲後證定家卿奧書判形等筆者寫置之也、於于今可證本歟 正徹

とあり、更に品田大吉氏藏武田本奥書にも同様の事が記されているのであり、之によつてみるも定家自筆武田本が冷泉家相傳の本であつたことが充分推定されるのであり、更に前田家書藏武田本卷末の「相傳系圖」には

業滋—元清—惟純—業正—宗屋—朝之—公之—見國—定家—爲家—四條—爲相—爲秀—了俊—正徹—知瀝—式水—常縁

と見えるのであつて、定家自筆武田本が爲相から爲秀へ相傳されたことが伺われ、よつて爲相の手もとにあつたものは武田本であ

り、祖父の眞筆を以て書寫したというのは當然定家自筆武田本それ自身をさすと考えられるのである。

五

それでは爲相自筆本は東常縁といかなる關係にあるかということに新たに紹介すべきは細川家藏、正徹正廣本の一本である。

本書は桐箱におさめられ箱表右肩に幽齋公筆と記された小紙片が貼られ、同じく中央には伊勢物語と墨書してある。縦横共に十六・三厘、蝴蝶装の冊子で題簽なく十葉ずつを二つ折としたものを五つ綴りて一帖としてある。本文は第二丁裏より書き出され、墨付本文八十五丁、一面十行書、一行約十三字詰、和歌は二字さげて書かれ、奥書十張、更に白紙五張がその奥についている。極札あり、小紙片に「細川殿兵部大輔藤孝幽齋公伊勢物語全部」と書かれていて、さて此の本奥書には先ず「抑根源」の流布本奥書があり更に

業平朝臣三品彈正阿保親王
母伊豆内親王

年月日 任左近將監

承和十四年正月補藏人嘉祥二年正月七日位下貞觀四年正月七日從五位上五年二月十日左近權佐六年三月八日左近權少將七年三月九日右馬權以十一年正月七日正五位下十五年正月七日四位元慶元年正月十五日左近中將二年正月廿一日相模守三年十月藏人頭四年正月兼美濃權守同廿八日

と業平の年譜が掲載され、更につづいて

合多本所用捨也可備證本
近代以狩使事爲端之本出來末代之人今案也更不可用之

此物語古人之説不同或稱在中將之自書或稱伊勢之筆作就彼此有書落事等上古之人強不可尋其作者只觀詞華言葉而已

戸部尚書在判

と武田本の奥書があり次に

以祖父卿眞筆本不違一字書寫校合之可備證本矣

藤爲相

と爲相の識語を載せ更にその奥に

本云

此寫本爲相卿自筆也朱點同尤爲證本間不違一字借乎平氏數書

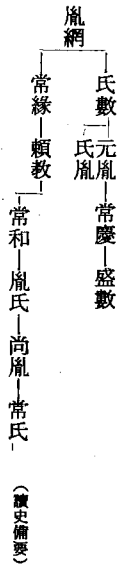
寫校合早

應永卅二年三月 日

正徹在判

と記されている。この奥書によれば「借乎平氏數」は「借乎平氏數」の誤りと目されるから正徹及びその高弟正廣の兩人、或はど

ちらか(恐らく正廣)が爲相自筆本を所有していた平氏數に借りて書寫校合したものの轉寫本であることが伺われる、而して平氏數と常縁との關係は



となつてゐるから氏數は常縁の兄にあたり、氏數に傳つた爲相自筆本を常縁が書寫することも又あり得たことであろうと思われ。大體この爲相自筆本が平氏に關係のあつたことは鹿兒島大學

文理學部舊藏「伊勢物語抄」の奥書に

他説書者祖父眞筆

戸部尚書在判
藤 爲相在判
下野守平在判

明應三年走馳日

と見えている點よりもこの事實を裏書する傍證たり得ると思われ
る。

六

而して前記正徹正廣本が完全な武田本であればも早や問題はな
いのであるが、「抑根源」の奥書に業平の年譜を掲載し、本文又

仔細に檢するに純粹な武田本本文とは決して云いがたく所謂、流
布本第二類系統に屬する形態を持つていたのであるが、奥書に於
いて正徹正廣の識語の部分を除けば全く同一の「抑根源」の奥書
と業平の年譜及び武田本奥書に爲相の識語を併せ持つ書陵部藏の
一本をとつて比較してみよう、ちなみに本書は縦二十三・四極横
十六・五極の蝴蝶装の冊子で題簽なく本文は一張裏より書き初め
られ、一張九行書一行約十九字詰、和歌は二字下げて書かれ、朱の
古註等が行間に書かれている。墨付全部で百四十七張、鷹司家よ
り出たと思われる墨印が始めにある。さて今、天福本武田本兩本
の本文相互に異同のある四十三箇所の點について武田本本文を中
心として調査すると第二表の如くなる。

〔第二表〕

〔同一は武田本と本文
が同一の意味である〕

章段	武 田 本	正 徹 正 廣 本	書 陵 部 本
5	いけとえあはてかへりけり	いけともえあはてかへりけり	いけともえあはてかへりけり
5	いといたく心やみけり	いといたう心やみけり	同
9	やつはしとはいひける	やつはしといひける	やつはしといひける
9	すゝろなるめをみることもおもふ	すゝろなるめをみることもおもふに	同
14	くりはらのあねはの松の	くりはらのあねはの松の	くりはらのあねはの松の
16	人からは心うつくしうあてはかなる ことをこのみてことに人にもにす	同	人からは心うつくしくあてはかなる ことをこのみてことに人にもにす

74	69	69	65	65	64	62	62	58	54	52	46	45	43	31	27	23	23
いはねふみかさなる山はへたてねと	女のねやもちかくありければ	女もはたあはしともおもへらす	このおとこは人のくにより	いとかなしきことかすまさりて	昔おとこ女みそかに	年月ふれとまさりかほなみ	われをはしるやとて	あつまりきゐてありければおとこ	ゆきやらぬゆめ地をたとる	かさりちまきをこせたりける	あさましくえたいめんせて	ほたるたかうとひあかる	いとかしこくめくみつかうたまひける	よしやくきはのならむさかみむ	かのこさりけるおとこたちぎとて	たのまぬ物のこひつゝそぬる	すきにけらしもいもみさるまに
同	同	女もはたいとあはしともおもへらす	同	いとかなしきことかすまさりて	同	同	われをはしらすやとて	同	同	かさりちまきおこせたりける	同	同	いとかしこくめくみつかうたまひける	よしやくきはよならむさかみむ	同	同	同
同	同	女もはたいとあはしともおもへらす	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	よしやくきはよならむさかみむ	同	同	同

123	かゝるうたをよみける		
115	おきのぬ宮こしま	同	同
112	ねむころにいひちぎれる女の	同	同
107	このあるしなる人	かのあるしなる人	かのあるしなる人
1.7	されとまたわかければ	同	同
101	さくはなのしたにかくるゝ人をおほみ	同	同
96	さりければこの女のせうと	同	同
96	秋たつころほひに	秋まつころほひに	同
90	さくらはなげふこそかくもにほふらめ	同	同
87	わかすむ方にあまのたく火か	わかすむ方のあまのたく火か	わかすむ方のあまのたく火か
87	あまのいさりする火	同	同
87	いしのおもてにしらきぬに	同	同
87	あふのすけとも	あうのすけとも	同
86	うたをよみてやれりける	うたをよみてやれりけり	同
83	思ひいてゝきこえけり	同	同
81	となむよみける	となむよみけるは	同
81	いたしきのしたにはひありきて	同	同
78	さるにこの大將	さるにかの大將	同

即ち四十三箇所中、武田本に本文が合致しないのは正徹正廣本で十九箇所、書陵部本では八箇所である。正徹正廣本がかくも異同の多い事はその最大原因として、此の本の書寫態度が極めて嚴密を缺いている證據に前記奥書の業平年譜中正月廿一日相模守は正月十一日の誤りであり、同じく年譜の最後の同二十八日卒を同二十八日とだけで卒を落している點、又正徹識語中の「借于平氏數」を「借早平氏數」と誤まつていると見なされる點等より推しても極めて杜撰な書寫態度が指摘出来るのである。而して兩本が一致して違つてゐるところは七箇所で、之は兩本が同一祖本より發したことを裏書きするものであり、本文の異同はいずれも天福本本文の混入である。こうした誤りは他の武田本の例についても言えるのであつて、幽齋系統の中院通勝本より發した舊四高本と岩瀬文庫本は同一祖本より出ているのであつて兩者の間にいささかの相違もあつてはならない筈であるが兩者を比較するに字詰、假名字體はもとよりその本文に於いて、四十一段、四十五段、五十七段、六十五段では（四箇所）六十七段、七十段、九十四段、百一段、百三段、百四段、百一段、百二十三段と總計實に十五箇所に及ぶ本文の差異を生じているのに徴しても、轉寫の際に於ける誤りはまぬがれ難いものであつて、まして正徹正廣本の書寫者が先に指摘した通り僅かの箇所に於いてすら三箇所も誤まつてゐるのであつてみれば本文自體にも大きな差異を生ずるに至るのも又當然のことといわねばならない。而して正徹正廣本に於いて注意すべきは爲相識語を持つ第二類諸本で本寫本の持つ應永卅二年にさかのほり得るものはないということである。よつて正徹正廣本

の書寫者は恐らく正廣であるから、或いは正廣によつて流布本の奥書と業平の年譜が書き加えられたのかもしれない。尚この業平の年譜は省略されたものも多いのであるが之は大津博士も指摘された如く之を省略した際、すぐ後ろについていた武田本奥書の最初の一行即ち「合多本所用捨也可備證本」が脱落したのでその爲「抑根源」の奥書の次に業平の年譜がなく、つづく武田本奥書が「近代以符」使事云々で始まるのは皆、業平の年譜を持つていた系統より出たものであることを自ら裏書きしてゐるものである。

七

以上は主として形態上より爲相識語と武田本及び流布本との關係を考察して來たが次に本文の内部徵證を池田博士の「伊勢物語に就きての研究、校本篇」にとられた流布本第二類系統のすべての諸本の本文について求めてみると第三表の如き結果を示したのである。底本には傳定家筆天福本本文をとり流布本第二類九種の諸本の中、四種以上にわたつて天福本本文と異同をもつ箇所の本文を流布本異同本文として示し且その種類をあげた。次に武田本文を流布本異同本文として示し且その種類を有し結果として五種の本文について流布本異同本文と同一本文を有し結果として天福本と相違する武田本の種類をあげた。最上段の數字は伊勢物語章段數、最下段の數字は武田本本文と一致した流布本第二類の數を示す。尚かなづかいによる相違は以下の調査に於いてもすべて之を省略した。例えばあ行のお、え、とわ行のを、ゑ、等である。尚用例中流布本の數字は次に示す如く

- ①：傳飛鳥井雅世筆本 ②：山崎宗鑑筆本

〔第三表〕

章段	傳定家筆 夫福本	流布本 異同本文	流布本	武田本	一致數
58	あつまりきめてありければこのおとこ	あつまりきめてありければおとこ	1 2 3 4 6 8	1 2 3 4 5	6
54	夢路をたのむ	夢路をたとる	1 2 3 4 5 6 8 9	1 2 3 4 5	8
52	かさなりちまきをこせたり	かさなりちまきをこせたり	1 2 3 4 5 6 7	1 2 3 4	6
46	たいめんせて	えたいめんせて	1 2 3 4 5 6	1 2 3 4	7
45	ほたるたかく	ほたるたかう	1 2 3 4 5 6	1 2 3 4 5	6
43	かしこう	かしこく	1 2 3 4 5 6	1 2 3 4 5	6
27	こさりけるおとこ	かのこさりけるおとこ	1 2 4 6 7 8	1 2 3 4 5	6
23	こひつゝそふる	こひつゝそぬる	1 2 4 5 6 7 8 9	1 2 4 5	8
16	こと人にも	ことに人にも	1 2 4 7 9	1 2 3 5	5
16	心うつくしく	心うつくしう	4 5 7 9	1 2 3 4 5	4
14	くりはらのあれはの松	くりはらのあねはの松	1 2 3 4 5 7 8 9	1 3 4 5	8
9	みることと思ふに	みることと思ふ	1 2 3 4 8	1 2 4 5	5
9	やつはしといひける	やつはしとはいひける	1 2 4 5 6 7 8	1 2 3 4 5	7
5	いといたう	いといたく	1 2 3 4 5 6	1 2 3 5	6
5	いけともえあはて	いけとえあはて	1 2 4 5 8	1 2 3 4 5	5

90	かくもにほふとも	かくもにほふとも	1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2 3 4 5	9
87	わかすむかたの	わかすむかたに	1 2 4 6 7 8	1 2 3	6
87	あまのいさり火	あまのいさりする火	1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2 3 4	9
87	いしのおもてしらぎぬに	いしのおもてしらぎぬに	1 2 4 5 6 7 8	1 2 3 4	7
87	あふのすけ	あふのすけ	1 2 3 4 5 6 7 8	1 2 3 4 5	8
86	うたをよみてやれりけり	うたをよみてやれりける	3 4 5 6 7 9	1 2 3 4	6
83	思ひいてきこえけり	思ひいてきこえけり	1 2 3 4 5 6 7 8	1 2 3 4 5	8
81	となむよみけるは	となむよみける	3 5 6 8	1 2 4 5	4
81	たいしきのしたに	いたしきのしたに	1 2 3 4 5 6 7 8	1 2 5	8
78	さるにかの大將	さるにこの大將	1 2 3 4 5	1 2 3 4	5
74	かさなる山にあらねとも	かさなる山はへたてねと	1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2 3 4	9
69	女のねやちかく	女のねやちかく	1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2 3 4 5	9
69	女もはたいとあはしとも	女もはたあはしとも	1 2 3 4 6 7 8	1 2 3 4 5	7
65	このおとこ人のくにより	このおとこは人のくにより	1 2 3 4 6 8	1 2 3 4 5	6
65	いとかなしきこと	いとかなしきこと	1 2 3 4 5 6 8 9	1 2 4 5	8
64	昔おとこ	昔おとこ女	2 3 4 5 6 8	1 2 3 4 5	6
62	まさりかほなき	まさりかほなき	1 2 3 4 5 6 7 8	1 2 4 5	8
62	我をはしらすやとて	我をはしるやとて	1 2 3 4 6 8	1 2 3 4 5	6

6	※時とや	時とかや	1 2 3 4 6 8	4	
31	※よしやくさはよ	よしやくさはの	4 5	2 5	
23	※すきにけらしな	すきにけらしも	2 4	1 2	
123	かゝるうたをよみけり	かゝるうたをよみける	2 3 4 5	1 2 3 4 5	4
115	おきのゐてみやこしま	おきのゐみやこしま	1 2 3 4 8	1 2 4 5	5
112	いひちきりける	いひちきれる	1 2 3 4 7 8	1 2 3 4 5	6
107	かのあるしなる人	このあるしなる人	1 2 3 4 5 7 8	1 2 3 4 5	7
107	されとわかければ	されとまたわかければ	1 2 3 4 7 8 9	1 2 3 4 5	7
101	人をほみ	人をおほみ	1 2 4 5 7 8 9	1 2 3 4 5	7
96	さりければ女のせうと	さりければこの女のせうと	1 2 3 4 5 6 8 9	1 2 3 4 5	8
96	秋まつころをひに	秋たつころをひに	1 2 3 4 5 6 7 8	1 2 3 4 5	8

- ③…傳明融筆本
- ⑤…傳四條隆重筆本
- ⑦…豊原統秋筆本
- ⑨…傳飛鳥井雅俊筆本
- ①…舊四高本
- ③…圖書寮本
- ⑤…高野博士本
- ④…一條兼良本
- ⑥…奈良京物語
- ⑧…片假名書入本
- ②…武田本の數字は
- ④…岩瀬文庫本
- ④…傳尊應准后筆本

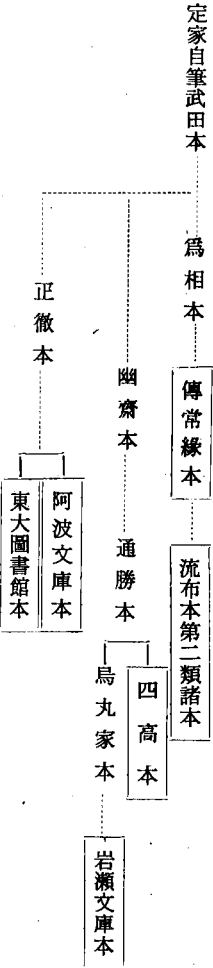
の五種の諸本を表わす

以上の調査に於いてその結果は次の如き事實を示した。即ち流布本第二類諸本九種の中、四種以上にわたつて天福本文と相違する異同箇所とその種類をあげた結果がなんと武田本と天福本の異同箇所となつてゐる四十三箇所そのものに實に四十一箇所にわたつて完全に一致を示したのである。他の二箇所は表の最後の方に※印で示した様に二十三段の「すきにけらしな」と三十一段の「よしやくさはよ」のな、よであるが之はも、のとなつてい

るのが流布本ではいずれも二種のみで數の點に於いて不足する
 であるが、而し武田本も五種の中、も、のとなつてゐるのは僅か
 二種で半數に滿たず、みせけちになつていたりして誤まられ易い
 條件を備えているので、決定的な相違點とはみなし難く、むしろ
 武田本文としてかくあるべしと規定されている四十三箇所の本
 文に合致しない流布本文で四種以上にわたるものは僅か表の最
 後に示した如く六段の「時とや」が「時とかや」となつてゐる一
 箇所であるが、而し流布本でも「時とや」となつてゐるのが三種
 類はあるのであつて三種超過してゐるだけであり、完全な違例で
 はなく要するに混亂せる流布本第二類系統に於いて天福本と本文
 を比較してみた結果がほぼ完全に武田本文に期せずして一致を
 示したこと、及び後に實證する如く流布本第一類とも完全な本文
 の斷絶を示してゐるのであつて、之等の事實は流布本第二類系統
 の諸本がいずれも武田本より發したという動かし難い内部實證に
 なり得たと思われる。

八

さて次に注目すべき事は前記「表」の流布本の欄の數字が示す



通り(1)から(9)までの中、(4)の符號即ち一條兼良本が八十一段の一
 箇所を除き、武田本異同本文に完全に一致を示している。この一
 條兼良本を池田博士は流布本第二類に入れられておられるのであ
 るがこの本は「抑根源」の奥書及び業平の年譜がなく、武田本奥書
 の後半と爲相の識語がついてゐるだけであつて、他の面について
 みるも明らかに武田本であり、之は本書が武田本奥書の前半が缺
 け爲相の識語がついてゐたために流布本第二類とされたのである
 うが本年二月、細川家の一條兼良本伊勢物語を閲覽した際にも武
 田本奥書が後半、同じところから書かれていた事實と想い合われ
 て兼良が書寫した伊勢物語は爲相筆武田本であつたことが伺われ
 伊勢物語の研究に一新紀元を畫した愚見抄の作者としての彼の學
 識と攝政關白に至つた彼の地位は相まつて爲相筆武田本の弘布に
 權威を與え又、正徹や正廣、更には二條家學統の常縁等によつて
 書寫されたため、室町期伊勢物語寫本の流布に大きな影響を及ぼ
 し、世間一般にくまなく流布するに至り、細川幽齋をして「世間
 流布の本」なる名稱を與えしめることになつたと考えられるので
 ある。以上の考察によつて次に示す如く從來の武田本系統に爲相
 本系統がここに新たに設定せられ、現在流布本の主流をなす第二

類諸本はことごとくこの系統に統合されるべき性格が明らかになつたと考えるのである。

九

さて次に問題は流布本第一類、即ち「抑根源」の奥書のみを有し、武田本奥書と爲相識語を持たない系統であるが、之は第二類に比して非常に少く、池田博士の校本篇にとられているのも、千葉本、七海本の二種のみである。元來、定家本は伊勢物語に限らず種々の勘物を存するのを特徴とするがこの二本にはそれが見えぬこと、又書陵部藏の「伊勢物語聞書」には「抑根源」の奥書の前に

當初所書本爲人借失乎仍愚意所存爲備隨分證本書之

于時建仁二年季夏中旬霖雨之間以假日終此功と見えるが建仁二年は定家の民部卿着任以前で流布本奥書にある戸部尚書に該當しないこと、以上の観点から、第一類の千葉本七海本は古本系統の一本に「抑根源」の奥書が後人によつて追記されたものでないかと本誌十七輯に述べておいたが、ここでは本文の比較校合によりその性格を明らかにしたいと思う。

十

先ず伊勢物語校本篇にとられている流布本第一類の千葉本七海本について同じく流布本第二類系統の九種に及ぶ諸本と本文を比較するに、千葉本、七海本のみにあつて第二類九種の諸本のいず

れにも全く見當らない本文箇所が千葉本に於いては實に六十九箇所、七海本に於いては七十一箇所を算することを得たのである。即ち平均七十箇所にも及んで千葉本、七海本が第二類諸本と全く異なる本文を持つということは、全然別系統の本文をそこに想定せざるを得ないのであつて、更にその七十箇所について今度は校本篇にとられている古本系統と比較してみると第四表の如き結果を示したのである。ちなみに底本文は傳定家筆天福本であり、本文異同箇所は、天福本武田本はもとより流布本第二類諸本のいずれにもなく只、第一類の千葉本七海本のみ存する本文で、古本系統にのみ一致を示す箇所である。諸本の符號は次の通りである。

(流布本第一類)

[千]……千葉本

(古本系統諸本)

[七]……七海本

[相]…傳爲相筆本

[爲]…傳慈鎮爲家筆本

[良]…傳良經筆本

[承]…承久本

[榮]…傳飛鳥井榮雅本

[慈]…傳慈鎮筆本

[肖]…傳肖柏筆本

[最]…最福寺本

[時]…時頼本

〔第四表〕

章段	傳定家筆天福本本文	流布本第一類異同本文	古本系統諸本	千葉本 七海本
1	おもしろきことゝもや思けん	おもしろきことゝや思けん	承、肖、時	七
1	むかし人は	むかしの人は	肖	七
4	たちてみゐてみゝれと	たちてみゐてみれと	最、時	千、七
6	きえなまし	きなまし	相、榮、時	千
9	さきたり	さきたりけり	肖	七
9	みちは	みちには	最	七
9	しもつふさ	しもつさ	爲、最	千
12	火つけむとす	火をつけむとす	爲、榮、慈、肖 最、時	千、七
13	うるさしとあるをみてなむ	うるさしとあるをみて	最	七
14	よろこほひて	よろこひて	時	千
21	かきをきたるを	かきをきたるをみて	相、肖	七
21	なにゝよりてか	なにゝよりて	相、時	七
22	とはいひけれと	といひけれと	最、時	七
23	女返し	返し	時	七
23	ほいのごとく	ほいのごと	相	千
23	こゆらん	ゆくらん	爲、承、最、時	七

以上の表の示すところに
よつて、現在の古本系統と
定家本がいかなる關係にあ
るか追つて發表の豫定で
あるが、^(註5)少くとも、天福本、
武田本、流布本第二類諸
本のいずれにも該當しな
い本文でそれが古本系統に
於いてのみ一致するものが
五十箇所及び、而もそれ
が古本系統の二種以上にわ
たるものに於いては二十七
箇所を算するのであり特に
※印をつけた八箇所は、實
に古本系統の四種以上にわ
たつて、千葉本、七海本の
本文と一致を示す箇所であ
つて、正にこの八箇所は古
本系統の特色を示すところ
とも云わらるべき箇所であり
この箇所は兩本が共に一致
を示すのは五箇所、他の三
箇所は兩本のいずれかがそ
れぞれ本文の一致を示して

81	さけのみし	さけのみして	肖	七
78	むかしたかきこと申す女御	むかしたかきこと申す女御	相	千
69	こよひさためよ	よ人さためよ	肖、時	七
69	いといたう	いたう	肖、最	千
69	かへりにけり	かへりにけり	承、肖	千
68	春のうみへに	春はうみへに	承、肖	千
65	この女の	この女	慈	千
65	こひしうのみ	こひしくのみ	最	千
65	ともつかさのみるに	ともつかさみるに	最	七
63	おもはぬ物を	おもはぬを	最	七
55	えうましう	えいふましう	相、爲、承	七
51	うへしうへは	うつしうへは	爲	千
50	とをは重ぬとも	とをを重ぬとも	相	千
44	いゑとうし	いゑとうしに	時	七
42	にくくはた	にくくは	最	七
41	さるいやしきわさも	またさるいやしきわさも	相、榮、肖、最	千、七
24	むかしおとこ	むかしおとこ女	最、時、爲、承、榮	七
23	喜びてまつに	喜びてまつを	相、爲、最	千

いるのであつて、第一類千葉本、七海本は正にその本文系統に於いて、天福本、武田本、流布本第二類諸本のいづれにも断絶する本文を有し古本系統の本文とそ、の流れを等しくする點に於いて古本系に屬さるべき性格を持つことが明らかになつたと考へる。

十一

而らば「抑根源」の奥書を持つた定家自筆本の本文は古本系統のそれであつたのかという問題になつて來るのであるが、池田博士が流布本第三類として、たつた一本のみをもつて立てられた彰考館藏の貞應二年十月廿三日の奥書ある貞和本は、實際に調査したところでは古本系の本文箇所を全

120	世へすとおほえたるか	世へすとおほえたる	慈	七
114	おほたかのかたかゝひ	おほかたのかたかゝひ	承、時	七
113	なかゝらぬいのちのほとに	なかゝらむいのちのほとに	相	千
107	とよみてやれりければ	とよみてやりければ	爲、最	七
107	うたはよまさりければ	うたはえよまりさければ	※ 相、爲、良、承 榮、肖、時	千、七
101	在原のゆきひら	在原ゆきひら	良	千
99	たれとしりにけり	たれとしりけり	最	七
98	おほきおほいまうちきみ	おほきおと	※ 相、爲、良、承	千、七
96	みめとそいふなる	みめといふなる	良、時	千、七
94	きりやちへまさるらん	きりやたちまさるらん	※ 爲、良、榮、時	千
93	おきておもひ思わひて	おきておもひわひて	※ 相、良、承、時	千、七
89	我よりはまさりたる	我よまさりたる	良、最	千
87	あしやのなた	あしのやのなた	相、榮、最	七
83	みむろに	かのみむろに	榮	七
82	みこうたを	みこ此うたを	相、榮、肖	七
82	みこのゝたまひける	みこのゝ玉うける	相、良	千

く持たずむしろ天福本と武田本の混成に近く又かつて松田博士が紹介された侍従と署名ある保阪本も古本の特色たる八箇所の本文

かのぎやうねん房の亭にしてかきうつしおはりぬ。尤秘藏のほん也、一字をたがへずかきうつしおはりぬ。

に一箇所しか該當せず明らかに兩本とも古本系と別系統であると考えられ、而もこの保阪本が次に述べることによつて或いは「抑根源」の一類の本文を傳えている一本でないかと推定されるのである。即ち他の流布本が「抑根源」の奥書に於いてその終りに「爲人。被借失仍爲備證本重所校合也」となつているのにこの保阪本は「以家本令書乎頗依爲證本也」となつている事と、最後の署名が戸部尚書でなく侍従となつている點を考へ合せて、彰考館藏の伊勢物語鈔に

此ほんは定家の自筆の本を子息光家の侍従入道成照坊かきうつしおもたれたりしを

と記されている事實に鑑み、私考するに保阪本は松田博士が想定されたように定家が侍従と署名した定家本の一本でなく、定家の子、侍従光家が家本即ち定家自筆本を寫し、侍従と署名した本の轉寫本でないかと推定され、而も「抑根源」の奥書を持つている點より推して、署名の侍従が光家であるなら「定家の自筆の本をかきうつした」というのであるからこの保阪本こそが「抑根源」の奥書を持つ第一類の本文を或は現在に傳えているものでないかと思われる。而してこの定家自筆本は光家に傳わらずに、池田博士も推定された如く、矢張り定家の子である山の阿闍梨定圓に相傳されたと思われることは現在、弘文莊に入つた順覺本の奥書に相傳本爲人被借失之間透得彼同本所書寫也、于時文永九年

十二月十二日記之定圓

と見える點より、定圓に相傳された「抑根源」の奥書を持つた定家自筆本は、文永九年十二月以前に人の手にわたつたまま借り失われ、そのまま消息を絶つて、再びこの世に表われなかつたのではないかと考えられるのである。

註1 古典の批判的處置に關する研究（第一部）

2 伊勢物語に就きての研究（研究篇）

3 岩波講座 伊勢物語定家本の展望

4 伊勢物語古註釋の研究

5 今夏宮本長則氏藏の傳爲氏本伊勢物語を見るに及んで古本系統の九種が定家本と思われること及び流布本第一類と深い關係を有することが判明した。詳細は後日の報告にゆずりたい。

6 和歌と新資料

本稿成るに際しては、岡一男博士、書陵部伊知地鐵男先生の御高配を得た事を記して深く謝意を捧げる。尚故池田博士の（伊勢物語に就きての研究）についても多大の啓發を蒙り、その御業績は長く忘れ得ぬところである。